

## 別子銅山の写真を読む

平成29年8月6日（日）10:00～11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

### 1. はじめに

地形図に記載されている等高線や地図記号などから、自然や人文内容を読み解くのを地理学用語で読図と言う。写真に写っている内容を読み解く言葉は今のところない。しかし、写真に写っているものを図画で示すことがある。レントゲン写真から疾病の判読をすることがある。その応用として航空写真や衛星写真の判読が発達してきている。地図は絵図から始まる歴史的時間の経過を経て「読む」の用語となった。

別子銅山を撮影した写真を図画で示した始まりは、昭和44年4月1日発行の「旧別子案内」（新居浜山岳協会・銅山峰ヒュッテ）の旧別子銅山遺跡のアルバムである。同書では巻頭において、別子銅山を描いた絵図も図画で示している。直近では、山村文化が「写真が語る」と題して7か所を図画で解説している。同書では他に、「別子鉱山を探る」で若干の場所の解説をしている。「住友別子鉱山史」の施設写真の解説で写真説明をしている。また、「あかがねの故郷」（別子銅山記念館）が写真付き説明板の設置後に小冊子に編集している。さらに、「別子鉱山写真帖」（光村印刷株式会社）の写真の解説で写真説明をしている。

現地を訪れても、そこにあった構造物は消滅していて、あるのは石積みだけであったり、産業遺産を構成していた中のほんの一部が残存していただけで、そこに何があったのかが分からなくなっている。幸いなことに別子銅山では早い時期に写真撮影がなされていたので、残された写真の中に、過去の景観として何が写っているのかを読むこととする。

### 2. 別子銅山の写真帳

明治14年 明治14年写真帳

別子銅山の近代化を政府関係者に理解させるとともに、万世不朽の財本の別子銅山の偉大さを御真影として知らしめる。

写真師：大阪の中村

明治23年 明治23年写真帳

別子開坑二百年を記念する。

写真師：大阪京町堀の若林耕七

明治31年 明治31年写真帳

写真師：光村利藻の代理2名による撮影

- 明治31年 住友家予州鉱業所写真帖  
別子近代化の最盛期の記念と一般広報として。  
写真師：光村利藻と推定
- 明治32年 明治32年別子鉱山大水害写真帳  
別子鉱山大水害被害の記録  
写真師：山田武雅
- 戦後刊行 旧別子の面影  
明治14年－27枚、明治23年－20枚、同年開坑二百年記念－2枚  
明治31年－36枚

### 3. 読む写真

01. 前山と牛車道 (明治14年)
02. 勘場 (明治14年)
03. 風呂屋谷 (明治14年)
04. 木方展望 (明治14年)
05. 高橋製錬所 (明治14年)
06. 東延 (明治36年頃)
07. 小足谷 (明治30年代)
08. 端出場 (昭和8年頃 住友別子鉱山史・下)
09. 東平 (大正14年発行の住友合資会社別子鉱業所概況報告・別子銅山)
10. 太東索道 (昭和26年発行の岩波写真文庫・銅山)

### 3. おわりに

別子銅山について多くの印刷物がある。現在の様子を語る写真が掲載されていて、過去の様子を語る写真も掲載されている。しかし、過去の写真は撮影してから相当の時間が経過しているので、写っているモノが何なのか十分には理解できないところがある。まずは写真が撮影された年を時間的に押さえていないと写っているモノが分からない。写真の説明用に写真をトレス用紙に丸ペンで写し取ると写真の細部まで見て描くので、見えていなかったモノを発見する。発見すると文字原稿に加筆していった。年に10回以上歩いている緑の回復した旧別子が、荒涼とした旧別子として見えてくる。

別子銅山遺産は、案内者付きで現地踏査しない限り分からない歴史遺産である。改めて写真を読み解いていくと歴史の断面がそこに写っていた。それにしても、先人が100年も前によく写真を撮ってくれたものだと感謝する。

【参考文献】

- 旧別子銅山案内 新居浜山岳協会・銅山峰ヒュッテ 昭和44年4月  
明治十四年撮影の別子鉦山写真帳とその意義 末岡照啓  
住友史料館報 第28号 平成9年7月  
明治二十三年撮影の別子鉦山写真帳とその意義 末岡照啓  
住友史料館報 第29号 平成10年7月  
明治三十一年撮影の別子鉦山写真帳と写真師光村利藻 末岡照啓  
住友史料館報 第30号 平成11年7月  
明治三十二年、別子鉦山大水害の危機対応と災害写真 末岡照啓  
住友史料館報 第47号 平成28年7月  
住友別子鉦山史 別巻 住友金属鉦山(株)  
別子鉦山写真帖 光村印刷(株) 平成23年1月  
写真は語る 山村文化 11号～15号、22号、30号、32号  
別子銅山産業遺産の残存状況について—新居浜市端出場周辺 橋本久美子  
愛媛県総合化科学博物館研究報告 第3号 平成10年3月

## 写 真 の 説 明

### 01. 前山と牛車道(明治14年)

縁起の端から北北西の歓喜坑・歓東坑、銅山越えを俯瞰する。

稜線部は、右から①**東山**が西に落ちてきて鞍部になった所が標高1294mの②**銅山越え**である。銅山越えの西は③**前山**である。銅山越えから④**旧中持ち道**が下に、⑤**牛車道**が西に延びている。前山の岩尾根の壁には⑥**地層の傾斜**が鮮明に見えている。その地層の中で、牛車道の左下から白い帯が見えているのが⑦**露頭線**である。牛車道は、前山の岩尾根の向こうの標高1324mの銅山峰の南面を通り、下って来て3回折れ曲がっている。3回折れ曲がった⑧**牛車道**の最上段の東向きは、現在登山道として利用している道である。最下段の西向きの牛車道は新蘭塔場の下を通る道である。新蘭塔場下の道の下は⑨**風呂屋谷**である。

銅山越えから下る旧中持ち道の右が⑩**山方集落**である。山方集落の下の⑪**大屋根**の中に歓喜坑と歓東坑の坑口、開坑課(旧敷方役所)がある。大屋根の前は⑫**下金場**(手選鉱場)である。右の大きく白く写っているのは⑬**ズリの堆積場**である。ズリ堆積場の下は⑭**地形**で、ズリ堆積場手前、右下角の長い屋根は⑮**焼き窯**である。

牛車道とズリ堆積場・地形の間が⑯**鍛冶屋谷集落**である。

ズリ堆積場の上端に続く水平の道は、現在⑰**プロモナード**と呼んでいる縁起の端から歓喜坑道への登山道である。プロモナードの道は、ズリ堆積場の上の2軒の建物まで階段となり、建物の跡から歓喜坑へと水平に続いている。西側の木々が小窓として切り開かれて新蘭塔場が正面に見える所である。ズリは明治32年の別子大水害で流失して今は無くなっている。

**※元禄7年の大火で杉本七助ら手代を埋葬した歓喜坑下10mの所を蘭塔場と呼んだが、明治12年に杉本らの碑石を移したので現在蘭塔場と呼んでいる所は新蘭塔場と表記する。**

旧別子 旧別子とは元禄4年(1691)から大正5年(1916)まで226年間別子銅山の採鉱ならびに、製錬の中心地であった所である。山中には多くの遺跡が残っている。新居浜市発展の原点に位置する所である。ここは住友企業の原点でもある。明治には約10,000人が住んでいた。その時の人口を比較すると、別子山村は、松山市、今治町、宇和島町に次ぐ県下4番目の人口であった。

銅山越え 嶺南と嶺北を結ぶ峠。コの字型の石積みの中には無縁仏を供養するために延享元年(1744)と大正5年(1916)に造られた石仏が安置されている。もう一体の石仏の年代は不明である。

牛車道 明治9年(1876)に着手したが、明治10年(1877)に勃発した西南の役により、労働者や火薬の確保が困難になり一時開鑿が中断されたが、明治13年(1880)に目出度町から立川中宿までが完成した。翌年から別子山の目出度町から新居浜浦の口屋までの28kmが使用された。牛

車の牛は広瀬幸平の故郷の近江牛が連れてこられた。

仲持ち道 元禄4年(1691)の別子銅山開坑当初は、別子本舗から天満浦に出るコースであった。距離は36キロメートルであった。元禄16年(1703)10月からは、別子本舗から銅山越え、石ヶ休み場、立川中宿を通過して新居浜浦の口屋に出るコースになった。距離は16キロメートルと短縮した。

男は45kg、女は30kgの粗銅を背負いの人力運搬で下した。

露頭線 銅鉞床が地表に露出した露頭線が銅山峰を横断している。大露頭は「蜂の巣焼け」と呼ばれた。地表の露頭探査を鉞探し(つるさがし)という。金属イオンを好むシダのヘビノネゴザ(カナヤマシダ・カナクソグサ)を指標とした山相学で探す。厚さが0.5~8.0m、平均厚さ2.5m。走行延長1,500mの銅鉞床は、世界で「別子型鉞床」の固有名詞と呼ばれた。海拔1,300mから海面下1,000mまで掘った。

歓喜坑跡 元禄3年(1690)に備中の吉岡鉞山支配人・田向重右衛門らが調査して鉞床を探し当て、翌年の元禄4年5月9日(1691)、幕府の稼行許可を得て採鉞を開始した。苦心の末に良好な鉞床を発見して歓喜した。

「予州別子山ノ鉞業ハ、万世不朽ノ財本ニシテ、斯業ノ盛衰ハ我一家ノ興廢ニ関シ、重且大ナル他ニ比スベキモノナシ」と住友家法の第二条で住友家の基盤と位置づける宝であった。

歓喜坑、歓東坑の入口の柱には、神仏の護符が祭られていたので坑口を「間符」と呼ぶ。

歓東坑跡 歓喜坑の東側の坑道。鉞床の東側の三角などの富鉞帯に続く。

## 02. 勘場(明治14年)

縁起の端から西の勘場、目出度町を俯瞰する。

城郭のような石積みの上が勘場である。明治12年(1879)の改革で重任局と名称変更する。階段の上の旗竿の右の櫓太鼓のある建物は①出店(後の採鉞課・採鉞本部)である。改革の時に櫓太鼓が広瀬幸平によって設置された。出店の前が②荷方でそこから右に続くのは③倉庫である。倉庫屋根の切れ間に④勘定場表門の石積みの門が見える。牛車道の起点となるこの石積みは現存している。出店と荷方の⑤前庭の対面の建物と北棟が⑥売場で、南棟が⑦新座敷である。新座敷の左前・石積み左端の所に⑧新座敷専用の石段が南側の石積みの所にある。銅山略誌に描かれている門は屋根の中である。銅山略誌と比べると前庭は明治になって狭くなっている。出店と荷方・倉庫の建物の間から⑨土持谷及び⑩新蘭塔場の小山の根の所の道が、明治13年(1880)に立川中宿まで開通した⑪牛車道である。稜線のピークは標高1466mの⑫綱繰山である。三角面の両側に⑬柵が設置されていて、内側は柵の内となっている。中ほどの柵は大きな杭が連立しているので、右上の迂り面下の崖錐の⑭落石防止杭である。杭の密度が高いのでまるで壁である。両脇の柵のような横棧が取り付けられていない。なお、別子本舗への人の出入りのチェックは、南は裏門、北は馬の背の番屋で行っていた。三角面の右が土持谷で、左は⑮見花谷、⑯両見谷の稼人集落である。三角面は尾根筋にあたり、出水に対して安全な位置となっている。手前の長い屋根は⑰焼き窯である。

階段下の右手の建物は天保12年(1841)頃(明治14年の41年前)に描かれた鉾山略式誌からすると**⑱医館・縄蔵**である。その前に勘場への**⑲大階段**がある。

重任局の中心部が乗っている石積みでは、階段下の張盤の左部と医館・縄倉庫の右奥部に木材を挟んで石を積んでいる。狭い谷間で垂直に石を積むための鎌掛け積みの**⑳帯木**である。

明治31年写真帳では、重任局は明治25年(1892)の火災で対岸の木方に同じような構造で再建したが、別子鉾業所の写真には、はっきりと帯木が写っている。

「旧別子銅山案内」の明治中期の旧別子の地図と照合すると、医館・縄蔵の右下が**A一心楼**、一心楼の右の長い階段右手が**B星加伊太郎宅**、星加宅の左下で東面が白い建物が**C伊予屋の小泉商店**、伊予屋の下の屋根が連なっているのが**D養気楼**。養気楼の左で焼鉾窯下が**E郵便局**となる。

勘場と目出度町 旧別子の鉾山集落の中心地。元禄7年(1694)の大火の後、歓喜間符の隣にあった勘場がここに移され銅蔵、食糧蔵、資材倉、来客接待所の新座敷等が付属していた。明治12年(1881)に重任局と改称され、広瀬宰平は改革で重任局の屋上には櫓太鼓を備え、従業員に時を知らせていた。明治25年(1892)の火災で焼失後は対岸の木方に移った。その跡地には、元禄7年(1694)の大火災の後に銅山の鎮護の神として縁起の端に勧請された大山積神社が遷座した。

鉾山施設の中枢部が勘場でその下の商店街が目出度町である。伊予屋雑貨店、料亭一心楼、饅頭の奥定商店等が軒を連ねていた。目出度町は「めでたまち」と呼んでいたが、今は「めったまち」と呼ぶ。郵便局、別子山村役場、小学校分教場、住友別子病院があった。大正5年(1916)の撤退で廃墟となる。

蘭塔場 元禄7年(1694)の大火災で亡くなった132人の内、元締・杉本助七ほか手代3人は旧勘場(歓喜・歓東坑から10m下)の沢下に土葬された。当時はここを蘭塔場と呼んだ。火災の少し後に、縁起の端に山神社(大山積神社)が、現在蘭塔場跡と呼んでいる小山には観音堂が設けられた。明治11年(1878)、広瀬宰平が4人の碑石を新蘭塔場に上げた。そして大正5年(1916)の採鉾本部撤退で、新蘭塔場の墓石は瑞応寺の西墓地に移された。

現在は、旧別子の新蘭塔場では元禄の大火災で亡くなった殉職者の蘭塔法会が行われている。

### 03. 風呂屋谷(明治14年)左右合成

勘場の大階段下から足谷の上流側を北北東に縁起の端と新蘭塔場の間を俯瞰する。

右上に縁起の端の**①大山積神社**がある。その背後の左に上がる稜線は西赤石山への稜線である。上り切ったピークが標高1626mの**②西赤石山**である。西赤石山から主稜線を左に取ってピークを一つ越えて下って少し上っている所が**③東山**であ

る。銅山越えは見えていない。左に上がっているのが④前山で、かすかに⑤牛車道が左上がりで見えている。

大山積神社を左に下りてくると⑥大鳥居の頭が出ている。大鳥居の下が⑦焼鉦窯で、その上には白煙が立ち込めている。鉦石を下す⑧シュートが石積み道と交差している。石積み道の先は⑨ズリ堆積場である。

写真中央部の明り取りが3つ設置されている建物が、明治8年に創設された⑩住友私立足谷小学校である。その後ここには、明治16年(1883)には病院が開設され、大正元年(1912)には自彊舎が開設された。小学校の下の左が⑪風呂屋谷で右が⑫鍛冶屋谷である。小学校の上の谷が⑬鍛冶屋谷集落でその奥に歓喜坑、歓東坑がある。

左上の前山南面に⑭牛車道が3回折れ曲がっている。その手前に⑮新蘭塔場が見えている。小山の上に新蘭塔場の石積みが見えている。元禄7年(1694)の大火の後に、亡くなった132人の弔いとして観音堂が建てられ、明治11年(1878)に広瀬が杉本七助ら手代4人の碑石をここに上げた所である。新蘭塔場の下の水平の石積みは⑯牛車道である。左上の建物の向こうを通って、⑰土持谷の永久橋を渡ると勘場に到着する。

左下の道は、勘場の大階段下から北に下がる⑱坂道で、右に⑲木製柵がある。手前一面に広がる所が目出度町である。

「旧別子銅山案内」の明治中期の旧別子の地図に照合すると、坂の突当りがA一心楼、一心楼の上がB星加伊太郎宅、星加宅の右下がC伊予屋の小泉商店、伊予屋の右下がD養気楼。養気楼の右下は足谷川となる。

大山積神社 元禄7年(1694)の大火後に、別子銅山の鎮護の神として大三島の大山祇神社から歓請された。当初は縁起の端に建てられたが、事業の変遷とともに、明治26年(1893)に重任局敷地に遷座した。旧別子撤退に伴い大正4年(1915)に東平へ、そして現在の生子山麓には昭和3年(1928)に遷座してきた。

小学校 学制が公布された明治5年(1872)の3年後の明治8年(1875)に目出度町に私立足谷小学校を創設した。明治19年(1886)5月には小足谷に尋常小学校を開校し、明治22年(1889)9月に足谷尋常小学校を建設、続いて高等小学校も併設した。明治27年(1894)には私立別子尋常高等小学校になった。明治32年(1899)3月の教員数は7人、在籍生徒数は男女合わせて298人であった。なお、明治30年(1897)には目出度町に分教場が設置されたが、住民の減少で明治45年(1911)に閉鎖した。大正5年(1916)の旧別子撤退で学校は廃校になった。

#### 04. 木方展望(明治14年)

勘場の新座敷南の石積みから足谷の下流側を南東に俯瞰する。

左上から稜線が高橋製錬所に向かって落ちて行っている。高橋の地名はこの尾根

の地形からの命名である。「高い尾根が谷に落ちる端」の意味である。便宜的に①**高橋の尾根**と呼ぶ。写真をもう一度見ると、右手の尾根は断層地形の②**三角末端面**の様に見えるのに比べて、この稜線は③**足谷川**に落ちる尾根の中で秀明な尾根である。

稜線の手前は④**寛政谷の焼き窯**の白煙で、⑤**東延谷**や⑥**寛政谷**が白煙でよく見えない。東延谷の向こうの高橋の稜線斜面にも⑦**高橋の焼き窯**が見える。左手前の上が⑧**縁起の端の焼き窯**である。白煙の中に焼き窯と四角に積み上げられた⑨**薪**が霞んで見える。焼き窯から下に2つ目の建物の奥が⑩**大山不動**である。大山不動の下には⑪**長い柵**が廻されている。大山不動はその後、喜三谷、山根の煙突山の西下へと移り、今は四国中央市土居町上野にある。

高橋の尾根が下りた端の高橋製錬所は、明治13年(1880)に2座が完成した。高橋製錬所の対岸が、今のダイヤモンド水の休憩所である。ダイヤモンド水の向こうの尾根が⑫**シハスの尾根**で、手前の尾根に大坂屋敷に続く⑬**馬道**が見える。馬道の中央部が⑭**奥窯谷**で、下部が⑮**裏門**である。馬道の手前が⑯**両見谷**の稼ぎ人集落で、右下の家の前からの道は見花谷の稼ぎ人集落に続く。

遠景の左端の山頂は標高1486mの⑰**東光森山**、右下の鞍部が⑱**大田尾越え**、大田尾越えから稜線が上がった板滝が標高1589mの⑲**大座礼山**である。そして右端の頂が標高1429mの⑳**三ツ森山**である。高橋の尾根との位地関係と右下の家からして撮影地点は、新座敷南の石積みの上である。現在は木々が繁茂しているので蘭塔場西のコルの西10mの斜面からズームで引くと同じように撮れる。

焼鉍窯群 焼鉍工程は、焼窯という石囲いの中に薪と生の鉍石を交互に積み重ねて1カ月ぐらい蒸し焼きにして硫黄を燃やして銅と鉄からなる焼鉍とした。これを荒吹炉に入れて、更に次の間吹炉に入れて淘汰して銅の含有量が約90パーセントの粗銅を取り出した。

吊り橋（以前はトラス橋と言っていた。）前の谷にせり出している溶岩の様なもの、製錬をして銅を採った残りの酸化鉄の銕(カラミ)である。山腹の上段には焼鉍窯が連なっていた。下段には溶鉍炉が連なっていて、カラミを川に流していた。

木方吹所 和式製錬では1トンの銅を生産するのに4トンの木炭を使った。

## 05. 高橋製錬所(明治14年)

現在のダイヤモンド水広場の下からトラス橋に向かって足谷を北東に俯瞰する。

谷の奥で右に霞むのが①**東山**、その左下で頂が白っぽいのが②**寛政の端**、左奥に霞むのが③**西山**である。左から45度くらいで下りる斜面が当たった所の岩尾は④**トラス橋**（今は吊り橋）の所である。岩尾には⑤**地層の傾斜**が見えている。岩尾下から水平に伸びているのが⑥**張り磐の水路**で、右上の岩場から左に下りている⑦**セメントの水路**につながり屋根に煙突が出ている建物の⑧**洋式製錬所**の水車を回している。水路の左の⑨**木製シュート**で、鉍石をズラしている。シュートの下の建物が



⑩貯鉱庫である。明治13年(1880)に完成した洋式製錬所右下が⑪硫酸工場である。左の⑫往還道は、左上にある現在のダイヤモンド水のレベルからは、少し下である。その分⑬足谷川の谷底に近い。

高橋製錬所 明治12年(1879)、ラロックの設計図を基本にして着工し、明治13年(1880)に2座が完成した。アメリカの銅価格の切り下げで世界の銅価格が下落して一時中止していたが、明治24年頃から洋式製錬が再開された。明治32年の鉱石処理能力は明治5年の50倍になった。溶鉱炉のほかに沈殿池、収銅所、倉庫が立ち並んでいた。明治32年(1899)の台風で大きな被害を受け、惣開に移転された。

## 06. 東延(明治36年頃)

第一通洞南口あたりから東延谷の上流側を北東に俯瞰する。

ルイ・ラロックの地形計画では30.98mの3段の石積みであったものを蛇紋岩で2段の①石積みに積み上げた。約7000㎡の山内で最大の地形である。石積みの下に②レンガの暗渠が大きく口を開けている。暗渠は約70mで東延斜坑口の南で開渠となっている。

地形の天場を右から見ていくと、右端の2階建ての洋風の建物が③採鉱本部である。その後ろが④機械場である。採鉱本部の左が⑤蒸気巻き揚げ機械室、その奥が⑥ヤゲンである。檜のように突き出した屋根の中には、巻き上げ機から伸びたワイヤーロープがテンションシープという滑車を通じて斜坑に延びている。蒸気巻き揚げ機械室の左が⑦蒸気機関室である。その奥が⑧コンプレッサー室である。それらの左のアーチ橋が⑨煙道で、黒煙を出している⑩煙突に連なっている。煙突の左で、柵を施した⑪門の向こうの屋根に2つの明り取りがある建物が⑫選鉱石場である。右上へ続く谷の奥が、地形を生み出した石積に使われた蛇紋岩の⑬採石場で、その途中に左上から⑭素麺の滝が落ちている。

東延 明治時代後期から大正時代初期にかけて、近代化の東延時代を築いた。採鉱本部は明治19年(1886)に小足谷から移ってきた。

石垣の築造は2年の歳月を要して明治18年(1885)に完成した。面石は背後の山腹にある蛇紋岩を採石して築造した。暗渠は30万枚の煉瓦を使用した。元禄時代には、東延を大根戸と呼んでいた。

東延斜坑 ルイ・ラロックの提言に基づいて、別子近代化で明治9年(1876)に着工し、明治28年(1895)に完成。工期は19年と4ヶ月を要した。斜坑口は幅20尺(6m)高さ9尺(2.7m)で、49度の傾斜で北より東35度30分の方向に526m掘り下げて、8番坑道の三角まで貫通した。斜坑の完成で別子の採鉱量は飛躍的に増大した。高低差は398m。

## 07. 小足谷(明治30年代)

中七番に向かう車道から小足谷を上流側の北に俯瞰する。

左の中から右下に下りてきているのが本流の①足谷川で、右上から下りてきているのが支流の②小足谷川である。

小足谷集落は旧別子の中でもっとも新しく開かれた。小足谷は大きく3つに分けられる。足谷川の右岸手が**A朝日谷集落**である。左岸は雇人が住む**B上前集落**と商人が住む**C下前集落**と上下に分かれていた。

「旧別子銅山案内」の明治中期の旧別子の地図と照合すると、③小足谷川に架かる橋の右下の川沿に④田口正明宅がある。橋を渡ってすぐ左の2階建ての建物は、明治32年(1899)の別子大水後に運送業を営んでいた⑤泉半次郎宅になる。元新居浜市長の泉敬太郎さんの父である。

泉宅の左上が醸造所の⑥倉庫で、左下が⑦河内屋、倉庫の左が⑧質屋の藤田松太郎宅で、倉庫の上の大屋根が⑨醸造所である。大屋根の向こうに煙が昇っている。倉庫と醸造所は⑩柵で囲まれている。醸造所の左斜め上3軒目のレンガ塀にかぶさる屋根が⑪採鉱課長宅である。採鉱課長宅左下のレンガ塀にかぶさる大屋根が、伊予屋の支店の⑫泉亭である。明治7年(1875)～8年(1876)に、ルイ・ラロックが宿泊して「別子銅山目論見書」を作成した。明治34年(1901)に住友が借り受けて接待館とした。伊予屋支店左の山道の右手の小さな建物が⑬小富士亭である。

小富士亭前から足谷川への⑭下り道を行くと、小足谷取銅所へ至る。下り道の上の⑮水平の山道が、勘場、歓喜坑、東延などに登っていく道である。

醸造所の上に⑯山林課長宅、⑰副支配人宅、⑱運輸課長宅と続いている。

**醸造所** 酒、味噌、醤油はすべて別子山を隔てた西条から角野・立川経由で運んでいた。それらの品質が良くなかったので足谷で造ることとした。

明治3年(1870)に設置し、兵庫県伊丹から杜氏を雇い酒造りに着手したが、いいお酒は出来なかった。明治6年(1917)暮れに岡山県玉島南の浦から杜氏を雇ってからようやくお酒らしいものができるようになった。後には味噌、醤油も造られ名称も醸造所と変更した。明治44年(1912)に製造中止、大正3年(1914)に廃止された。最盛期には、年間100k lの酒を製造した。銘柄は「イゲタ正宗」、別名「鬼ごろし」と呼ばれた。

**採鉱課長宅** 別子銅山経営の中心の採鉱課の課長宅跡。採鉱課は製錬課、運輸課とともに多数の職員を抱えた、別子銅山の中核をなす組織で、採鉱課長はそれを統括した。課長宅の北側に煉瓦アーチの穴の水汲み場が残っている。

**接待館** 勘場の新座敷が接待所であったが、明治34年(1901)に、小足谷にあった伊予屋支店(泉亭)を改装して接待館とした。要人の宿泊や来賓の接待、職員の親睦会に使われた。同年10月には住友家15代家長・住友友純が宿泊した。明治7年～8年に広瀬宰平とルイ・ラロックは、泉亭に宿泊して別子銅山近代化計画書の「別子銅山目論見書」を作成した。

## 08. 端出場(昭和8年頃 住友別子鉱山史・下)

牛車道の龍河神社南あたりから足谷川の上流側を俯瞰する。

現在、端出場と呼ばれている所は、かつては向原と呼ばれていた。ズリでもって地形されたことが足谷川の護岸の高い石積みによって分かる。元の端出場は、観光列車の打除駅の所であった。昭和5年(1930)に東平から採鉱本部が移転してきたことに伴う開発で、端出場の地名が端出場隧道をくぐって北側に移転した。別子鉱山鉄道の端出場駅の移動にもなったのであろう。

右下角の吊橋が①葦谷橋である。ここが端出場事務所への正面の通路となる。通路の左が②駐輪場で、突当りが③調度販売所である。その左手前が④病院、調度販売所の裏手が⑤正門詰所、右が⑥端出場駅舎である。駅舎の右に延びる線路が⑦別子鉱山鉄道下部線で、惣開に延びている。線路の上には鉱車が連結して止まっている。調度販売所と駅舎の向こうの4連の大屋根の建物が⑧手選鉱場で、そこへ斜めに架かっている細長い屋根が⑨ベルトコンベアーである。ベルトコンベアーの下の丸いタンクが⑩沈殿槽である。ベルトコンベアーの右端の石積みの上にあるのが⑪看量場である。看量場から右に延びる線路の先の大きな建物が⑫貯鉱庫と⑬砕石場である。貯鉱庫の上のZ状の道は、⑭鹿森への山道である。

左上角にうっすらと見えるトラス橋が⑮四通橋である。四通橋を渡った所に第四通洞がある。四通橋の右手前のL字型の建物が⑯事務所である。事務所の右前が⑰更衣場で、その右が⑱浴場である。浴場の右斜め上の屋根が⑲修理工場である。修理工場の左奥の石積みのしたに端出場隧道がある。修理工場の右手前の建物が⑳電話交換所である。

左の大きな川がA足谷川で、対岸の石積みの手前に端出場水力発電所がある。

更衣場手前のB更地の部分は、後の東端索道の基地になる箇所である。上空には東黒索道が架かっている。

**端出場** 採鉱本部は昭和5年(1930)に東平から端出場に移った。以来、別子銅山が長い歴史を閉じた昭和48年(1973)まで採鉱の一大拠点であった。

明治24年1月10日(1891)の鉄道布設許可命令書には新居郡角野村立川村字端出場と地名がでていいる。錦繡峰の尾根の枝が出た端の場所を意味する地名。旧別子の高橋と同じ考え方による地名である。

**端出場水力発電所** 明治45年(1912)5月に発電機2号基を設置し、周波数30ヘルツ、出力3000キロワットで竣工した。銅山川の水を日浦で集め、第三通洞の坑内経路で石ヶ山丈の貯水池まで導き、総落差597.18m、有効落差560.61mで発電した。大正12年(1923)には、四阪島製錬所へ送電するために3号機を設置し、出力4500キロワットに増設した。昭和5年(1930)、重力式の七番川堰堤建設で出力が4500kwから4800kwに増加した。昭和45年(1970)に任務を終えた。

**第四通洞** 海拔156mの端出場坑口と大立坑を結ぶ水平坑道として明治43

年（1910）に開鑿に着手し、大正4年（1915）に貫通した。

四通橋 大動脈第四通洞につながる橋として大正8年（1919）に開通した。

貯鉱庫 鉱石をためる施設として大正8年（1919）に完成した。高さ15m、横幅35mの貯鉱庫の壁が現存している。貯鉱庫の上にはダンプカーが通るようになっていて上から鉱石を貯鉱庫に落としていた。貯鉱庫の底部には横孔が4箇所あり、孔から破砕場に鉱石が移されていた。鉱石は破砕場を経て下部鉄道に積み込まれた。

別子鉱山鉄道 下部線は明治24年（1891）に着手し明治26年（1893）に竣工した。端出場から惣開まで10,461m。昭和52年（1977）に廃止した。

上部線は、明治25年（1892）に着手し明治26年（1893）に竣工。標高1100mの角石原から標高835mの石ヶ山丈まで断崖の上の5,532m。明治44年（1911）に廃止した。

## 09. 東平(大正14年発行の住友合資会社別子鉱業所概況報告・別子銅山)

端出場水力発電所水路から西を望む。

峠部の細長い建物が①**東平小学校**である。小学校から右に上がると**A一の森**、左に上がると**B二の森**である。小学校の下が②**気象観測所**で、更に下の白っぽい大屋根が③**病院**で、病院の左が④**販売所**である。販売所と病院の向こうの水平部は、呉木への⑤**トロッコ道**で、病院の裏手にマンブが口を開けている。そして、右下の二層屋根の大きな建物が⑥**娯楽場**である。娯楽場前の道はペルトン前の⑦**トラス橋への道**である。その道を下ると索道の⑧**バケット**が道の上に点としてかろうじて見えている。トラス橋への道を挟んで左手が⑨**保育園**である。保育園左の立ち上がった斜め通路が⑩**インクライン**である。

左中央部から水平部は、第三通洞からの電車の⑪**引き込み線**の所である。現在は駐車場になっている。よく見ると上の貯鉱庫は南側だけである。

引き込み線の上の5窓の建物は、第三通洞の開鑿や電車用の変電所として設置されたが、林業課の事務所になった後に⑫**保安本部**となったレンガの建物である。現在はマイン工房として活用されている。保安本部の左は⑬**電話交換所**で、右は第三から移転してきた⑭**採鉱本部**である。それらの上の石積みの上の建物は接待館の⑮**東平荘**である。

電車の引き込み線の下に、⑯**貯鉱庫**、⑰**手選鉱場**、⑱**貯鉱場**、⑲**索道基地**と続いている。索道基地の右にインクラインに向かう⑳**木製支柱の棧**があり、其の下は東黒索道の切込みの斜面となっている。

東平 東平は標高750mの山中に位置し、唐谷、柳谷、一本松、第三、喜三谷、東平、辻坂、呉木、尾端からなる。東平の全盛期は採鉱本部が東延から移された大正5年（1916）から端出場へと移転される昭和5年（1930）までで、昭和元年（1926）は5,000人余りが住み、山の町として賑わった。東平坑の終坑は昭和43年（1968）。

- 古くは「とう」と呼ばれ、「大田尾越え」、「田和越え」の「越え」が欠落した「田尾」、「田和」から新地名の「峠」への移行期の名称。
- 東平小学校 明治39年(1906)開校。生徒数21人3学級で開校した。大正2年(1913)の生徒数は433人。昭和43年(1968)に閉校した。
- 娯楽場 明治45年(1912)設置。建坪220坪、木造3階建て、2042人収容。芝居、映画、山神祭典、正月、親友会、坑夫取立式などに利用された。
- 病院跡 明治38年(1905)に住友病院の出張所を開設した。
- インクライン 大正5年(1916)頃に、東平・端出場索道の物資運搬路として斜長95m、仰角21度でインクラインが作られた。
- 接待館 明治42年(1909)に、住友の要人や大切な客のもてなしのために接待館が建設された。東平の地名にちなんで東平荘と命名された。昭和43年(1968)の東平坑の閉坑まで60年間利用された。屋根は雪が滑り落ちやすいようにトタン葺き、部屋は10畳ほどの広い部屋が4室、6畳の部屋が6室、食事をする20畳の広間が1室あった。昭和初期には、暖房設備が完備した20畳くらいの洋間が増築された。
- 採鉱本部 第四通洞、大立坑の完成を機会に、大正5年(1916)、採鉱本部を旧別子の東延から東平の第三通洞前に移転した。昭和3年(1928)には、東平地区に移転し、昭和5年(1930)には端出場に移転した。

#### 10. 太東索道(昭和26年発行の岩波写真文庫・銅山)

プール山の下から北を俯瞰する。

太平坑からの鉱石を①**太東索道の索道基地**で下した②**搬器**が上って来ている。その索道基地の手前には③**木製支柱**が見える。索道基地の右が④**貯鉱庫**である。貯鉱庫手前の回廊のようなのは、第三通洞から搬出した鉱石の⑤**運搬路**である。搬器の真下が⑥**東端索道の基地**である。その右の2棟の建物は関連の建屋である。関連の建屋の向こうにインクラインに向かう⑦**トロツコ道**が架かっている。その下を⑧**東端索道**がくぐって端出場へ下っている。向うの尾根に⑨**索道トンネル**が見えている。

東黒索道は明治38年(1905)に、3,575mの長さで設置された。昭和10年(1935)には、端出場までに短縮されて2,717mの長さとなった。同年に太東索道が1,312mの長さで東平のプール山まで設置された。プール山から貯鉱庫まではズラシで移されていた。その後、索道が貯鉱庫まで延長されたことがこの写真で分かる。索道の長さは1,373mとなった。

なお、プールの建設は昭和30年(1955)である。

索道基地 明治38年(1905)に東平～黒石停車場に自動複式索道が設置され、鉱石や物資の運搬を行った。昭和10年(1935)には短縮して東平～端出場とした。同年に太平坑～東平の索道が完成する。最初はプール山の所が太東索道の終点であった。そこから下の貯鉱庫へはシュートで鉱石を落とした。やがて索道は貯鉱庫まで延長された。